

重度障がい者が暮らすスヌーズレン空間



オランダ・ハルテンベルグ試み

子どもたちは一時もじっとしていない、教師や保育者の話
に耳を傾けてくれないといった戸惑いの声が、しばしば現場
から聞こえてきます。現在の子どもの多くはテレビやテ
レビゲームに多くの時間を費やすだけでなく、一日の時間が
小刻みに分けられ忙しく動いています。また、子どもたちは
日々、大量の刺激的な情報に囲まれて生活していますが、そ
れらの情報の大半は視覚的な感覚だけを頼っているがゆえ
に、自己の基本的な触覚・聴覚・臭覚だけでなく、楽しむ、
リラックスするといった環境とは程遠い空間にいます。オランダの障がい者施設（ハルテ
ンベルグセンター）で、ユニークな発想の生活空間が作られました。ハルテンベルグは、
オランダとドイツのライン川沿いの国境の町

（E D E 市内終戦記念平和像）－筆者撮影－

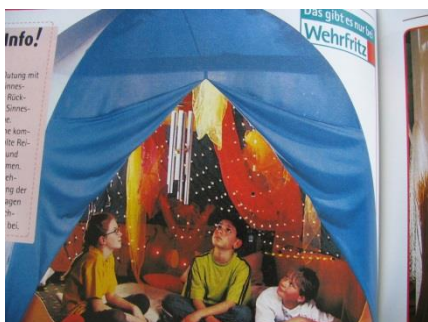
E D E 市にあり、E D E 市は第二欧州世界大戦において、ドイツ軍と連合国側がライン
川に架かる橋の攻防で戦った有名な町であると共に、1945年5月にオランダとドイツが
終戦協定を調印した町としてオランダの人々の記憶に刻まれた町でもあり、毎年、町の広
場になる記念像を囲んで終戦記念式典が行われています。ハルテンベルグの試みのユニ
ークさは、障がい者施設において、重度障がい者の人たちは介護してくれる人々の意図や
指示で生活を営まざるをえない現実には、障がい者と介護者（健常者）の間にそびえてい
る壁の高さをどのように切り崩していくか、その両者の壁を取り除かない限り、互いの理
解はありえないのではないかという発想から、感覚体験を集約した生活空間作りが始め
られたことです。



オランダ語でスヌーズレンと呼ばれ、にお
いをかぐ、ぼんやりするといったことを意味
するそうです。これまでの障がい者施設での
発想では、障がい者を健常者と同じような社
会生活ができるように訓練し教育していくこ
とに何の疑いももたれなかったのですが、ス
ヌーズレン空間では障がい者自身が主役で、
彼ら自身の反応を大事にし、また、障がい者
自身が自分で反応するまで、たとえ何時間でも待ち続けることができる空間と時間が認
められた場所です。また、部屋の壁にはさまざまな種類の異なった素材でできた物、例え
ば、柔らかい布、スポンジ、毛糸、木片、パズル等がはめ込まれ、快適な触覚体験を豊富

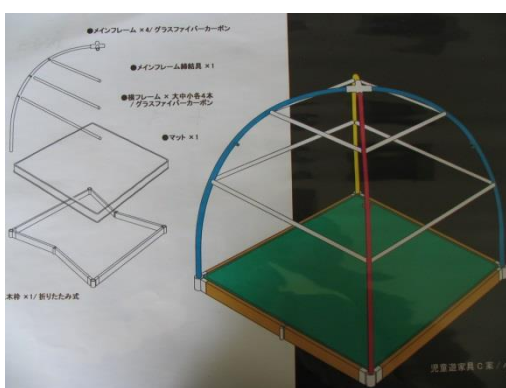
に体験する工夫がなされ、暖かい雰囲気を作り出しています。

(ハルテンベルクのスヌーズレン感覚の壁) ー筆者撮影ー



このような生活空間は、障がい者の人々に必要であると共に、現在の多くの子どもたちが抱えている、感情のコントロールのできなさ、じっと待つ、集中する力が極端に不足している保育・学校の中で暮らす子どもたちにも必要だという認識がもたれるようになりました。

(新商品：リラクスケアアー・(株)一歩しん提案商品)



(新商品：リラックス空間ラオム・(株)一歩新提案商品) 左はイメージ写真

リラックス空間と時間の共有

筆者は今年(2004年)6月にハルテンベルクのスヌーズレン空間の見学が許可され、リーナさんが世話する重度障がい者のグループと一緒にスヌーズレン体験のひとつを持ちました。耳が不自由で視覚障がいのハンス君(18歳)と感覚の部屋で数時間を過ごしました。



リーナさんたちの関わり方を、見よう見まねでハンス君と遊んだのですが、彼女たち指導員は特別な訓練や療育活動をするのではなくて、ごく普通の遊びを共に楽しんでいる雰囲気でした。(ハルテンベルクのスヌーズレン空間) ー筆者撮影ー

部屋の中にはウォーターベッド、丈夫なハンモック、壁面は鏡におおわれ、天井から大きなカーテン状の布が部屋全体に吊り下げられたリラックス空間、そして部屋から心地良い音楽が流れています。「私たちは訓練士ではありません。障がい者たちが気持ち良いと感じる時間を得るための援助者です。」とリーナさんが言う如く、他の数人の女性たちも障がい者の人たちの側で寝転び、顔や体に柔らかい刺激を与えるかのように触れてい

ます。ハンス君も僕の手をきつく握りしめたり、頭を抱きかかえるようにしたりして、しきりに体を床にバウンドさせるような動作を繰り返しています。「彼はハッピーだと表現しているのですよ」と彼女は横から声を掛けてくれました。グループで暮らしている一般の生活寮では、彼はしばしばパニックを起こし、日常の集団生活では適応しにくいタイプだそうです。一週間に数時間、ハンス君はこのリラックス空間で過ごすことで、彼自身の存在感（居場所間）を確かめる時間なのです。これまでは、障がい者自身の症状や障がい度に関心が注がれてきた療育のあり方から、障がい者がその障がいと共に生活時間を過ごす空間や時間のあり方に、関心の方向が向けられていることは画期的な発想の展開だと思います。